



Title	スチュアートによる日中和平工作の再考（1937-1941）：教育家・民間外交家・宣教師としての多重役割
Author(s)	肖, 凱豊
Citation	国際公共政策研究. 2025, 29(2), p. 59-81
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100460
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

スチュアートによる日中和平工作の再考（1937-1941）

—教育家・民間外交家・宣教師としての多重役割—*

Re-Examining Stuart's Efforts for Sino-Japanese Peace (1937-1941) :
The Multifaceted Roles of an Educator, Civil Diplomat, and Missionary*

肖 凱豊**

Kaifeng XIAO **

投稿論文

初稿受付日 2024年10月4日 採択決定日 2025年1月8日

Abstract

This study re-examines the peace efforts of John Leighton Stuart, president of Yenching University in Japanese-occupied Beijing, during the Second Sino-Japanese War from 1937 to 1941, a period before Japan and the United States entered into conflict. The research question is: "How did Stuart's peace efforts unfold during the Second Sino-Japanese War?" By utilizing personal letters, government documents, memoirs, and diaries, this study examines Stuart's interactions with Japan, the United States, and China, illustrating the unique peace-promoting activities of this American while safeguarding Yenching University. The findings suggest that, driven by Stuart's unique identity and ideology, his series of activities to preserve Yenching University, promote peace, and enhance Sino-Japanese-American relations constituted a distinctive "Stuart-style" approach to peace efforts. Consequently, direct peace negotiations involving Chiang Kai-shek were merely one part of Stuart's numerous wartime efforts to promote peace, and he did not regard them as his primary or formal tasks. However, as an educator, civilian diplomat, and Christian, Stuart integrated his internationalist beliefs, Christian principles, and the national interests of Japan, the United States, and China into his actions, shaping his unique role in promoting peace during the war.

キーワード : 日中戦争、日中和平工作、スチュアート、日米中関係、燕京大学

Keywords : Second Sino-Japanese War, Sino-Japanese Peace Efforts, John Leighton Stuart, Japanese-American-Sino Relations, Yenching University

* 本稿の執筆にあたり、親切かつ丁寧にご指導いただきました国際公共政策研究科の中嶋啓雄教授に深く感謝申し上げます。

** 大阪大学大学院国際公共政策研究科博士後期課程

1. はじめに

1.1 : スチュアート、燕京大学及び華北

スチュアート（英語：John Leighton Stuart、中国語：司徒雷登）は、教育者、外交官、宣教師としての多様な役割を担い、1876年に浙江省杭州の宣教師家庭に生まれ、1962年にワシントンで亡くなった。中国での50年間、スチュアートは中国の政治、教育、文化に深く関わり、胡適などの知識人や蔣介石などの政府高官から尊敬と友情を得た。

1919年、スチュアートは金陵神学院の教職を辞し、北京に赴いて燕京大学（略称は燕大）の学長に就任することとなった。スチュアートの指導の下、燕京大学は中国の伝統文化と西洋思想の融合に重点を置き、冰心、費孝通といった著名な知識人を輩出し、中国で最も影響力のある基督教大学の一つに成長した。日中戦争勃発後、反日の評価を背負いながら、燕京大学は北京で日本と共存していた。太平洋戦争が勃発すると燕京大学は閉鎖を余儀なくされ、成都に移転して活動を続け、スチュアートも日本により3年半の間拘禁された。1945年8月、日本の敗戦後、燕京大学は教育を再開することができたが、1950年代の朝鮮戦争勃発後、燕大はアメリカ文化のプレゼンスの象徴として中国で消滅した。一方、スチュアートは1946年にアメリカ駐中華民国大使に任命され、マーシャル特使と共に国共内戦の調停に着手していた。1949年に中華民国の大陸政権が崩壊した後にアメリカに帰国し、毛沢東はその際に「さらば、スチュアート」という文章を発表し、彼を風刺した。1952年、体調不良と時局を考慮し、大使職を辞任した。

1937年7月7日の盧溝橋事件後、中国人による統治を掲げる親日の華北政権が設立され、華北は日本の間接統治下に置かれた。同年12月14日、華北の日本軍の支援のもと、スチュアートの友人である王克敏「中華民国臨時政府」が北京で樹立された。1940年3月、汪兆銘が南京国民政府を樹立した後、中華民国臨時政府は解散し、後は王揖唐を委員長とする「華北政務委員会」となり、名目上は汪兆銘政権に属するが、実際には独立の権力を持つようになった。これら二つの政権は河北省、山東省、山西省、北京市、天津市、青島市を管轄し、いわゆる傀儡政権・偽政権と呼ばれていた。

北京が日本に占領された1937年7月28日から真珠湾が攻撃された1941年12月7日までの間、スチュアートはいくつかの重要な役割を果たした。まず、教育者として燕京大学の存続と安定を確保し、占領地の青年に質の高い教育を提供しただけでなく、世界各地の文化人と緊密な関係を構築した。また、スチュアートは華北で日中の当局者の共存を実現し、アメリカの外交政策決定者との接触も維持した。彼は何度も重慶を訪れて蔣介石と会談し、結局は失敗に終わった日中和平の努力に参加し、日米中の重要な架け橋となった。しかし、この4年半の間にスチュアートが果たした多様な役割に関する包括的な研究はまだ比較的不足している。

1.2 : 先行研究

まず、これまでのスチュアートに関する研究は、伝記的に彼の生涯を記録するか^{1,2}、1946年から1949年にかけて彼が駐中華民国大使を務めた際の役割を分析するものが多いが³、日中戦争期におけるスチュアートによる「日中和平工作」についての分析は十分とは言えない。

¹ 邵玉銘(Yu-ming Shaw), *An American Missionary in China: John Leighton Stuart and Chinese-American Relations* (Cambridge, MA: Harvard University Asia Center, 1992).

² 郝平《無奈的結局：司徒雷登与中国》（北京：北京大学出版社，2011）。

³ 林孟熹《司徒雷登与中国政局》（北京：新華出版社，2001）。

⁴ Kenneth W. Rea and John C. Brewer, eds., *The Forgotten Ambassador: The Reports of John Leighton Stuart, 1946-1949* (Boulder, CO: Westview Press, 1981).

また、従来の1937年から1941年におけるスチュアートの活動に関する分析は、その多くが日中和平の「調停」として位置付けられてきた。歴史研究の中で、何（1989）⁵は、スチュアートが4回の調停において、基督教の非暴力原則とウィルソンの理想主義に根差した理念を持ち、新しい世界秩序を実現するために平和的手段による日中紛争の解決を提唱していたと指摘している。しかし、スチュアートは日本国内の和平派勢力を過度に信頼し、人間性の善良さに対する信念によって、侵略者と被侵略者の境界を曖昧にしてしまった。さらに、スチュアートはアメリカ政府を代表することができず、米・日・蔣・汪の4者間の利益対立は調和することがなく、彼の個人的な努力では状況を変えることができなかつた。しかし、何の研究は「スチュアートの和平調停」という視点に重点を置いており、史料を網羅的に用いているわけではないため、結果として、和平工作にのみ注力した「民間外交官」を描いた論文となり、スチュアートの思想と行動の全体像を示すものとはなっていない。

加えて、楊（2006）の研究もスチュアートが王克敏や重慶国民政府の要人である宋子文と行った和平調停に焦点を当てたが、スチュアート自身の戦時中の活動に十分焦点を当てたものではなく、「和平調停」という枠組みを超えた分析には至っていない⁶。邵（1992）の見解によれば、スチュアートの4回の和平工作は失敗に終わる運命にあった。なぜなら、最初の3回の調停を支持した喜多誠一率いる日本の華北方面軍と、最後の板垣征四郎率いる中国派遣軍は、日本の全国家権力を代表することができなかつたからである。しかし、邵は日本だけでなく台湾の史料も使用しておらず、研究の視野が十分に広がらなかつた。また、スチュアートの多面的な役割についても、十分に包括的な分析が行われていない。

和平工作について、楊、邵と何は、和平を求めながらも最終的に失敗した調停者としてのスチュアートの姿を描いているが、実際には彼の役割や行動はどのようなものであったのか。邵が指摘するように、スチュアートには多くの仕事があり、単に和平を仲介するためだけに自由中国（重慶国民政府支配地域）に行ったわけではない。この観点から見れば、日中和平のための仕事は、スチュアートの数ある雑用の一つに過ぎなかつたということはあるのだろうか。そのため、本稿では、燕京大学の存続と維持を目指し、日米中関係の改善に向けてスチュアートが行った一連の活動を「スチュアート式」の和平工作として位置付け、その意義を探ろうと試みる。

1.3 : リサーチクエスチョンと史料の運用

以上のことから、先行研究は貴重な視点を提供しているものの、スチュアートの和平工作や、汪兆銘政権に対する態度、蒋介石との面会の状況など、全貌を明らかにしていない。また、教育者・宣教師としてのスチュアートの立場についても、完全な分析がなされているとは言い難い。先行研究の問題点を解決するため、本稿では、「日中戦争中、スチュアートの和平工作の実情はどのようなものであったのか」というリサーチクエスチョンに取り組もうとするものである。具体的に、本稿では、スチュアートの和平工作の実情を検討することで、彼の和平工作が単に蒋介石と交流するだけにとどまらず、燕京大学の維持や日中米関係の改善を目指した一連の活動全体を含むものであることを明らかにし、これこそが「スチュアート式」の和平工作の特質であるという論点を検証したいと考える。

そこで、本稿では、以下の一次史料を用いて、日中戦争中のスチュアートの日中和平工作と彼の多面性を検討することを試みる、(1) 中国大陸：周仏海日記、燕京大学教員の回顧録など。(2) 台湾：国史館に所蔵されている重慶政府関連資料、蒋介石日記など。(3) 日本：防衛省や外務省に所蔵され

⁵ 何迪「一位美国传教士的和平幻想—司徒雷登与中日和谈」『美国研究』1989年春季号（1989）：23-33。

⁶ 楊天石「王克敏、宋子文與司徒雷登的和平斡旋」『中国文化』第23期（2006）：86-95。

ている資料。(4) アメリカ：スチュアートの自伝、イエール大学に所蔵されている燕京大学関連資料（主にイエール神学校所蔵の燕京大学理事会向けのスチュアートの定期報告、スチュアートの個人書簡など）、FRUS を代表とする政府資料。

2. 和平と抵抗の狭間

2.1：戦争初期の恐怖：最初の武漢への旅（1937年7月～1938年7月）

1937年7月28日、激しい戦闘の末、日本軍が北京を占領することとなった。スチュアートは、日本による北京の爆撃が燕京大学を巧みに避け、中国軍の宿营地以外に一発も着弾していないことに気づいた。しかし、日本兵は従わない警察や村民に対して残虐な射撃や斬殺を続けていた⁷⁸。これに衝撃を受けたスチュアートは、燕京大学のすべての財産にアメリカ国旗を掲げ、在北京アメリカ大使館に燕大がアメリカの資産であることを日本に伝えるよう依頼した。9月には、日本の軍事力が圧倒的な優勢を持ち、南京政府が撤退しなければ完全に崩壊するだろうと判断した⁹。この状況下でスチュアートは、燕大が狭隘で狂信的な軍国主義者の無情な支配下にあると感じたが、同時に、この戦争が圧迫された中国知識人に奉仕する新たな機会を燕大に提供しているとも考えていた¹⁰。

当初、日本側は燕大の中国人職員を侮辱するなど、間接的な手段で開校を断念させようとしたが¹¹、スチュアートの強い意志により、9月には通常通り開校した。スチュアートは、日本当局との理解を得ることが急務であると考え、東京帝国大学卒業の燕大生である蕭正誼を秘書に任命し、日本側との連絡を担当させた¹²。さらに、スチュアートは無許可の外出、出版物、学生集会を禁止する規定を設け¹³、中国語の告知を通じて、日本軍が燕大に細心の注意を払っていることを伝え、校内のすべての人に抗日活動を避けるよう呼びかけた¹⁴。また、スチュアートはローズベルトのシカゴでの演説とアメリカ国務省による日本への非難に大いに喜んだ。彼は、華北のアメリカ人がアメリカの消極的な対中国政策に屈辱と失望を感じており、米英が戦争に直接介入せずとも、日本に制裁を課す必要があると考えていた¹⁵。

10月、キャンパスは平穏であったが、北京の状況は正反対で、日本軍の残虐行為は激化していた。スチュアートは、できる限り日本による燕京大学への干渉を阻止し、燕大を自由の精神的象徴にしようと望んだ¹⁶。スチュアートの記録によると、軍当局は警察に公共の場で日本の勝利を祝うよう強制し、商人たちは日本の勝利の飾りを買うためにお金を寄付し、教育機関は横断幕を作って祝賀集会を開いた。毎日、列車が日本軍と朝鮮軍の大群を運んで来て、商人や大学の財産を占拠し、麻薬などの不法取引を行った¹⁷。また日本軍は新聞や教科書を厳しく統制し、日本と華北政権を賛美するポスターが街中に貼られた。スチュアートは、燕京大学の運命が華北の政府形態と密接に関係していると予見していた。彼は、もし日本の軍国主義が満洲や朝鮮と同様に華北を支配すれば、燕京大学は日本から

⁷ Stuart to Garside, 26 July 1937, J. Leighton Stuart File, Records of Yenching University (hereafter cited as JLS-RYU), United Board for Christian Higher Education in Asia, 475 Riverside Drive, New York City, Box 359, Folder: 5528, 397. Collected by Yale University Library, Divinity Library.

⁸ Stuart to Trustees, 31 July 1937, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5529, 403.

⁹ Stuart to Trustees, 16 September 1937, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5529, 434-436.

¹⁰ Stuart to Garside, 3 September 1937, JLS-RYU, Box: 359, Folder: 5529, 429-431.

¹¹ Stuart to Faculty members On Furlough, September 29, 1937. JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5529, 447.

¹² Stuart to Trustees, 16 September 1937.

¹³ Special Regulation for the Session 1937-8, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5529, 439.

¹⁴ 司徒雷登啓, 1937年10月22日, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5529, 465.

¹⁵ Stuart to Garside, 8 October 1937, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5529, 451.

¹⁶ Stuart to Trustees, 16 September 1937, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5529, 434-436.

¹⁷ Stuart to Trustees, 8 October 1937.

身を守ることができなくなると述べた¹⁸。

同じく10月、スチュアートは、燕大にとっても華北にとっても、日本軍による直接統治よりも中国人の政府による間接統治の方が良いと判断し、旧友の王克敏らに華北政権への参加を勧めた。スチュアートは、日本の指導者たちが中国と対等な立場で和平協定を結びたいのであれば、華北政権の成立は絶好のチャンスになるだろうと書いている。その後の12月14日、北京（旧称北平）で中華民国臨時政府が樹立され、王克敏が華北政権の委員長（首脳）となったが、スチュアートが説得的な役割を果たしたことは明らかである。11月、スパイによる嫌がらせの中、スチュアートは燕大で反日活動は行わないと日本に確約した。スチュアートはまた、燕大とハーバード大学の提携のように、日本の大学と提携を結び、燕大を守り、学術と基督教で日中間の平和と理解を促進することも考えた¹⁹。この時期、日本と燕京大学は互いに共存する方法を模索している——燕大の貴重な印刷物は東京から飛行機で補給され、日本の軍医も伝染病対策で燕大に協力している²⁰。

1938年1月、スチュアートは南京陥落時の日本軍の残虐的な行動を理事会に非難した。同時に、華北政権の教育部長であった湯爾和が、清華大学の庚子賠款（義和団事件賠償金）基金を新たに設立された教育部に信託するよう、アメリカ大使館との連絡をスチュアートに依頼した。湯爾和は長年の友人であり、スチュアートはそうせざるを得ないと思った²¹。この時点でスチュアートは、自分がいわゆる漢奸（漢民族の裏切者）や興亜院華北連絡部長の喜多誠一ら日本の高官と接触していることが、燕大の安定のための最良の保証であると確信していた²²。1月16日、ドイツによる日中和平交渉、「トラウトマン和平工作」が失敗し、日本政府は「国民政府を相手とせず」と宣言して、これにより日中戦争の公開調停は行き詰まり、スチュアートによる和平工作の端緒となった。

2月17日、日本軍が燕京大学付近に駐留し、スチュアートは敵意を感じた。日本軍はまた、秘書である蕭正誼に、爆撃されない第三国系学校のリストを見せたが、驚くべきことに燕大はその中に含まれていなかった²³。同時に外務省は、燕京大学は反日運動の源流の一つであるが、中国事変の絶好の機会を利用して、中国人学生を講義で指導し、親日思想を植え付けることで、燕京大学の反日感情を変えることができると判断している²⁴。2月19日、日本側の圧力に押され、スチュアートは日本の北京大使館に非公式に次の提案をした、「(1) 新しい日本語の講座を開設し、日本文学と日本史を教える日本人教授を招聘する。(2) 夏に80名の卒業生を日本に派遣し、5月までに見学を行う。(3) 外務省が費用を負担することを希望する。」外務省は3月に、日中関係の緊張を理由に日本見学は不可能だが、講座の開設と教授の招聘費用は補助できると返答した。在北京日本大使館は、5名の日本人教授を派遣する計画を進め、燕大側から「自発的」に要請するよう促した²⁵。しかしその一方で、2月24日、親日派であるとの非難を避けるため、スチュアートはやはり庚子賠款や外務省からの資金流用を望まず、学術機関である「ハーバード・燕京学社」からの資金調達を希望した。スチュアートによれば、日本と中国は軍事的な勝敗以外の相互理解の基盤を見つけなければならなかった²⁶。

¹⁸ Stuart to Trustees, 1 November 1937, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5530, 475-478.

¹⁹ Stuart to Trustees, 1 November 1937, JLS-RYU.

²⁰ Stuart to Trustees, 22 November 1937, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5530, 495-497.

²¹ Stuart to Trustees, 8 January 1938, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5531, 516-519.

²² Stuart to Garside, 11 January 1938, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5531, 520.

²³ Stuart to Trustees, 17 February 1938, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5531, 533-534.

²⁴ 秋山書記官発廣田外務大臣宛、1938年2月17日発、「3. 燕京大学ノ件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B05015934100、対支救恤事業関係雑件（H. 6. 2. 0. 20）（外務省外交史料館）

²⁵ 甲集団参謀長発次官・次長宛、「燕京大学より当地大使館宛申出の件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C04120255600、支受大日記（密）其10 昭和13年自3月3日至3月11日（防衛省防衛研究所）

²⁶ Stuart to Serge Elisseff, 24 February 1938, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5531, 536-537.

2月26日、スチュアートは一連の教育会議に参加するため、北京を出発し、上海経由で武漢に向かった。27日、北京のアメリカ大使館は國務省に対し、スチュアートからの伝言を報告した。それによると、トラウトマン和平工作の中心人物であり、参謀本部次長である多田駿が、日中戦争の拡大を阻止するため、王克敏に次の和平条件を提示したという、(1) 中国が反日活動を抑圧する。(2) 華北に独立政府を設立する。(3) 日中経済協力を推進する。(4) 中国は賠償金を支払う。これらの条件が受け入れられれば、日本は蒋介石政府を和平交渉の相手とする用意があるというものだった。同時に、日本は広東、広西における英国の勢力範囲、さらに甘肅、新疆、寧夏におけるソ連の勢力範囲を承認することになる。アメリカ大使館のロックハート参事官は、この条件は日本が以前から提示していたものであり、蒋介石はすでに拒否している²⁷。

同じ27日、駐中国大使ジョンソンは、アメリカ公民が日中間の調停者を務めることはできず、スチュアートの和平工作は極めて賢明ではなく、アメリカ政府は示唆的な日中和平交渉さえ支持することはできないと主張し、國務長官のハルもこれに同意する。同僚からの批判に対して、3月4日、ロックハートはスチュアートを擁護し、スチュアートはアメリカ政府に助力を求めたことも、大使館を通じて情報を伝えたこともなく、彼自身も漢口（武漢三鎮の一つ）に向かったのは蒋介石との長年の友情が理由だと明言していると述べた²⁸。

3月11日、スチュアートが漢口に到着すると、ジョンソンは再びハルに対し、スチュアートが日中和平を推進しようとしていると報告したが、アメリカ政府や国民が日中間の調停者を務める基盤はないと強調した。また、ジョンソンは中国外交部に対して、スチュアートがアメリカ政府を代表していないことを通達した。15日、スチュアートはジョンソンに対し、自分が蒋介石に和平条件を伝えていないこと、そしてこの漢口訪問により日中和平の実現はまだ不可能であることを確信したと述べた²⁹。しかし、国民党中央宣伝部副部長の董頭光は1939年に、スチュアートが1938年3月12日に蒋介石に王克敏の和平提案を確かに伝えたと証言したが、蒋介石はそれを拒絶し、「日中問題の結果は、中国の成功か失敗のどちらかだ——私自身は、成功しない結果をすべて失敗と見なす」と述べた³⁰。また、スチュアートと面会した翌日、蒋介石の日記もこの立場を裏付けており、「中国の対日抗戦は、単なる一時的な勝敗や得失を超え、東アジアの数千年の幸福にかかわる問題である。だからこそ、どんな犠牲を払ってでも目的を達成しなければならない」と記されている³¹。こうして、スチュアートによる最初の和平提案の伝達は終わりを迎えた。その時、南京はすでに陥落しており、武漢防衛が国家の大義となっていたため、蒋介石は日本側の厳しい条件を受け入れることができなかった。

同年6月初め、外務省は3つの奨学金枠を提供し、燕京大学が日本史を教える教授を採用するよう要請していた。スチュアートは、日本軍が教授に燕大の内部事情を報告させることは確実であり、日本の要求に従えば中国人の怒りを招き、学問の自由を放棄することになると考えた。しかし、日本人教授の採用を拒めば、燕大は危険にさらされるというジレンマに陥った³²。やむを得ず、スチュアートは日本の北京大使館に次のように書簡を送った、(1) 強制がなければ、燕京大学は新民会（中華民国

²⁷ Foreign Relations of the United States (hereafter cited as FRUS), 1938, III, "The Counselor of Embassy in China (Lockhart) to the Secretary of State," Peiping, February 27, 1938, Document 113, 459-462.

²⁸ FRUS, 1938, III, "The Ambassador in China (Johnson) to the Secretary of State," Hankow, March 1, 1938, Document 116, 469; "The Ambassador in China (Johnson) to the Secretary of State," Hankow, March 2, 1938, Document 117, 471; "The Secretary of State to the Ambassador in China (Johnson)," Washington, March 2, 1938, Document 118, 473.

²⁹ FRUS, 1938, III, "The Counselor of Embassy in China (Lockhart) to the Secretary of State," Peiping, March 4, 1938, Document 120, 479. "The Ambassador in China (Johnson) to the Secretary of State," Hankow, March 16, 1938, Document 131, 535-536.

³⁰ FRUS, 1939, III, "The Ambassador in China (Johnson) to the Secretary of State, Chungking", July 21, 1939, Document 173, 815-816.

³¹ 蒋介石《蔣中正日記》《雜錄》、1938年3月13日（台北：抗戰歷史文獻研究会、2015）、122。

³² Memorandum regarding the appointment of a Japanese on the Faculty of Yenching University, June 1 1938, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5532, 587.

臨時政府の文教機関）が学生と直接接触し、宣伝活動を行うことに反対しない。(2) 燕京大学は学生が共産主義、反日・反中華民國臨時政府の運動に参加することを禁止する。(3) 燕京大学は日本人教授を採用する³³。6月17日、2名の日本人が燕京大学の閑静な場所に潜入し、反日スローガンを書き込んだ。一人は中国人学生の夏服を着ており、もう一人はその様子を撮影していた。昼頃、日本の憲兵隊はその写真を頤和園で展示し、燕大の反日活動の証拠であると主張した³⁴。さらに、政府から各大学に出された命令に従い、燕京大学は新民会に協力し、新民会の原則を歌いながら、反共・反蔣デモに参加し、「殺人と放火を繰り返す共産党を打倒しよう」、「国家と人民を破壊する国民党を打倒しよう」などのスローガンを叫ぶ必要があった³⁵。スチュアートはますます、日本人との友好的な関係を維持することが難しいと感じるようになった³⁶。

7月、日本は再び圧力をかけ、教授の採用がさらに遅れるなら、燕大生を逮捕すると脅した。しかし、スチュアートは燕大が閉鎖されても、軍事的な脅迫には屈しないと断固として拒否した。日本大使館はそれ以上の圧力をかけることはせず、スチュアートに対し、9月の新学期に燕京大学が運営できることを友好的に保証している。スチュアートは再び、燕京大学の運命が中国の主権回復と密接に結びついていることを嘆いた³⁷。これらの脅迫行為は、日本が華北占領地で常套手段であり、実際に燕大に損害を与えたわけではないが、日本の間接統治を確立する一環であった。

2.2 : アメリカの介入への期待 : 第2回の南下 (1938年7月~1939年7月)

華北における燕大の状況が厳しさを増すにつれ、スチュアートはアメリカの戦争調停に期待し始めた。1938年7月15日、スチュアートはローズベルトに手紙を送り、アメリカが対中援助を強化し、中立法を実施することを求めた。スチュアートは、燕京大学の独立が弱体化していること、日本が華北を植民地として扱おうとしていることに触れ、アメリカの対中援助が不十分であるのは、国際法上、日本が宣戦布告していないためか、それとも経済的損失を恐れているためかと、問うた³⁸。8月26日、ローズベルトは返信で、スチュアートの見解はアメリカの外交政策と概ね一致しているが、中立法に関しては実行が難しい。何故ならば、もし中立法が厳格に施行されれば、交戦国からの輸入品はすべて自国の船で輸送しなければならなくなる——日本はそれができるが、中国はできないと述べた³⁹。

9月1日、スチュアートは元満洲国の外交部大臣、現新民会副会長の張燕卿と会談し、張は以下の内容を述べた、「私は燕大の立場を理解し、新民会が燕大を守るために最善を尽くす。また、戦争は日本国民の利益に合致せず、西側諸国も日本の拡張を制限するだろう。日本は中華民國臨時政府のすべての機関を支配し、華北での反日活動を抑え、欧米学校を閉鎖しようとしている。中国人は主に生存のために行動しており、民族感情が主な動機ではないが、私は満洲が日本に併合されることを望まなかったため、満洲国の建国に積極的に参加した。かつて張学良や蒋介石が日本に抵抗することに期待を抱いていたが、その後、国民党上層部の腐敗に失望し、現在は中国の主権と領土の保全だけを重視している。」スチュアートは、公然とした「漢奸」がこのような発言をするのを聞いて非常に驚き、たとえ日本が重用する対日協力者であっても、必ずしも親日派ではないと結論づけた。

³³ President of Yenching University to Mr. R Yaguchi, June 15 1938, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5532, 588.

³⁴ Memorandum, June 17 1938, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5532, 588.

³⁵ Orders from Ministry of Education of the Provisional Government, June, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5532, 588.

³⁶ Memorandum, June 17 1938, JLS-RYU.

³⁷ Stuart to Trustees, July 29 1938, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5532, 610-613.

³⁸ Stuart to Roosevelt, June 15 1938, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5532, 603-604.

³⁹ Department to Stuart, August 26 1938, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5533, 635.

劇的なことに、張燕卿との会談が終わった後、スチュアートはすぐに顔色が悪く、隠れ潜んでいる共産党のゲリラ隊長に会い、その隊長の無私の愛国精神を称賛した⁴⁰。同じ9月、同盟通信社北支総局長の松方三郎と会談した際、松方は北京が引き続き中国の文教中心地であり続けることを期待していた。スチュアートは、日本の侵略は燕大が目指す中国統一と独立の達成を妨げていると指摘し、北京が文教の中心地としての地位を保つためには、燕大の存続が不可欠であると述べた。また、燕大は学問の自由を維持し、華北の政府は真に中国人によって構成されるべきであると主張しつつも、燕大は日中理解を深めるために日本人の教員や学生を受け入れる意志があることも伝えた⁴¹。9月における三つの異なる陣営の人物との会話は、戦時中のスチュアートの活動を象徴する一場面でもある。

スチュアートはますますアメリカが日中和平をもたらすことを切望するようになった。10月15日、スチュアートは同志社大学の元学長、日本で右派勢力と対立したため辞職した湯浅八郎と会談した。湯浅は、日本国民はアメリカが戦争の調停者になることを歓迎するだろうと信じていたが、軍の指導者たちの面子を保つ必要があると強調した⁴²。湯浅に触発されたのか、スチュアートは同日15日にもローズベルトに書簡を送り、中立法は実現不可能であることを理解しつつも、華北が朝鮮や満州国と同じような支配を経験する可能性があることを表明し、アメリカ政府が日中和平の仲介をすること、日本がそれを受け入れなければアメリカは日本に禁輸措置を取ることができることを提案した⁴³。ローズベルトはこれに返信しなかった。また、同日、スチュアートは協和医学院（ロックフェラー医学院）の学長ヘンリー・ホートンらと連名で国務省に書簡を送り、アメリカ政府に対して対日禁輸を実施するよう求めた。彼らは、日本の指導層の中には和平を望む者がいると指摘し、傀儡政府が無能である以上、外部勢力が介入しなければ中国の主権は回復しないと訴えた⁴⁴。

10月末、スチュアートは華北政権の委員長である王克敏と会談した。王は、「宮殿であり牢獄でもある」旧北京政府の外交部庁舎に籠もり、ほとんど外出することも恐れていた。スチュアートは直接的に、ローズベルトによる調停のタイミングが成熟しているかどうかを尋ねた。王は、「もしドイツやイタリアが率先して調停に乗り出せば、日本軍は面子を保てるだろう。この時、ローズベルトが重要な役割を果たすことができる。日本人は戦争を終わらせたいと考えており、特に兵士たちは家に帰りたいが、最も過激な一派は依然として戦争を続けたがっている」と述べた。スチュアートはさらに、宇垣一成が戦争の拡大を阻止できず、他方では多田駿が和平調停を望んでいるが、主戦派が広州の陥落を招いたと指摘し、一体日本には和平派があるのかどうか尋ねた。王は首を振り、笑みを浮かべて、日本人は最初から政策を持っておらず、何をするかは誰も分からないと答えた。彼はまた、中国人は私を漢奸と罵り、日本人は私が何もしていないと文句を言っている。日本が同意しないかもしれないが、辞職したいと語った⁴⁵。スチュアートは、戦争を終わらせるためには、アメリカはウィルソン大統領が述べた「友好的な援助 (Friendly Helpfulness)⁴⁶」を実行し、日本が九カ国条約を受け入れて中国の領土と主権を尊重するしかないと考えた^{47,48}。

11月14日、スチュアートは北米の基督教徒に対し、世論を喚起し、アメリカの対日武器売却に反対するよう呼びかけた⁴⁹。12月19日、汪兆銘が重慶から離脱し、もう一つの中国政府を樹立する日本

⁴⁰ Stuart to Trustees, August 29 1938, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5533, 638-641.

⁴¹ Summary of a Statement to Mr. S. Matsukata, October 1 1938, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5533, 649-652.

⁴² Stuart to Garside, October 17 1938, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5533, 663-664.

⁴³ Stuart to Roosevelt, October 15 1938, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5533, 659-660.

⁴⁴ Letter to Secretary Hull, October 15 1938, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5533, 661-662.

⁴⁵ Stuart to Trustees, October 28 1938, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5533, 671-673.

⁴⁶ President Wilson's Announcement to the Armistice to Congress, 11 November 1918.

⁴⁷ Stuart to Trustees, October 28 1938, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5533, 671-673.

⁴⁸ Stuart to Trustees, November 14 1938, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5534, 687-688.

⁴⁹ Stuart to "Fellow Christians of North America," 14 November 1938, JLS-RYU.

の汪兆銘工作が具体化し始めたが、これはスチュアートと王克敏が嫌っている計画でもあった。この時期、何人かの燕大生が拘留中に日本憲兵の拷問を受け、共産黨員や反日分子であることを無理やり認めさせられ、これに対してスチュアートは頭を抱えていた⁵⁰。1939年元旦、魯迅の弟、日本留学経験のある燕京大学の客員教授周作人が襲撃されたが、弾が急所を外れたため命を取り留め、日本軍は犯人を捜索していた。スチュアートは、犯人が燕大の二人の新入生であり、キャンパス内の漢奸を懲らしめる愛国団体に属していることを知っていたが、その事実を隠すことに決めた⁵¹。また、スチュアートは共産党に対する描写をより積極的なものに変え、中国共産党は単なる急進的な社会改革運動であり、現在は国民政府と共に日本に抵抗する仲間であり、戦後中国の共産主義は消滅すると述べた⁵²。この時点で、日本軍が憎んでいる「反日活動」や「共産党」に対して、スチュアートはどちらにも反対していなかった。

1939年2月1日、一人の日本軍人であり基督教徒でもある人物がスチュアートに対し、燕大が反日的な傾向を持っている証拠が多数あると告げ、大学側は誠意を示すべきだと警告した。スチュアートは、教授の採用問題は1年以内に解決するが、燕大は自発的にその手続きを進めるべきだと答えた⁵³。2月16日、日本大使館は、燕大内部で反日活動が行われているとして、それを理由に行動を起こす可能性があるとして再び圧力をかけ、脅迫してきた。これに対してスチュアートは、21日に日本人教授を雇用する計画を再確認し、大学内の反日行為を根絶することを約束し、これにより日本軍の干渉を避けようとした。日本人は明らかに苛立ち、「常識を持ってほしい。学問の自由という曖昧な原則を持ち出すな。軍隊は直接的に学生と接触することができるのだから」と語り、これは明確な脅迫であった。スチュアートはやむを得ず、再び王克敏に助けを求めた。旧暦の新年であり、王克敏はスチュアートのために茶会と杭州の伝統的な新年の演し物を用意し、喜多誠一と話し合っただけで燕大の安全を守るようにすると約束した。スチュアートはまだ安心できず、華北方面軍参謀長の山下奉文にも助けを求めた。山下は、燕京大学が日米親善を強化することを期待し、その後燕大を訪問したいと述べ、間接的なながらも保護を約束した⁵⁴。その後、スチュアートは、燕大は中国の抗戦のために奮闘し続けるべきだと考え、その具体的な方針としては、日本人を刺激しないようにしつつ、華北政権との関係を保ち、日本の侵略者には妥協しないという立場を維持することである⁵⁵。

実際のところ、日本軍は燕京大学が中華民国臨時政府に反対し、反日・親欧的であると常に疑っていたが⁵⁶、日本側もまた、華北の基督教系大学が国際条約によって保護されており、「不可侵」の性質を持っていることを理解していた。フランス領インドシナと日本の拡張政策が対立していたため、フランス系の中法大学に対しては、日本軍はより強硬な態度を取り、徐々に圧力をかけ、必要であれば閉鎖を計画していた。一方で、アメリカとの密接な貿易関係や、日独伊三国防共協定の締結を考慮し、日本はアメリカ系の燕京大学やドイツ・イタリア系の輔仁大学に対して寛容な政策を採用し、強制的な圧力を加えるつもりはない⁵⁷。しかし、スチュアートは日本の政策を知らず、ただ燕京大学が存続できなくなることを恐れていた。

⁵⁰ Stuart to Trustees, December 5 1938, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5534, 702-704.

⁵¹ Stuart to Trustees, January 10 1939, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5535, 725-726.

⁵² Stuart to Trustees, January 10 1939, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5535, 727-730.

⁵³ Stuart to Trustees, February 2 1939, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5535, 741-743.

⁵⁴ Stuart to Trustees, February 23 1939, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5538, 919-921.

⁵⁵ Stuart to Trustees, March 23 1939, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5536, 784-785.

⁵⁶ 「警務参考資料 北支ニ於ケル抗日教育概況（別表三）」北支那方面軍憲兵隊司令部、1939年3月20日付（東京大学近代日本法政史料センター原資料部、石井島文書、III - 58）。前掲小野氏「日中戦争期華北占領地における文教政策の展開」から引用、83。

⁵⁷ 甲集団参謀長発次官・次長宛、1938年6月18日発、「新民会の主宰により第3国資本関係の学校を剿共滅党週間運動に参加せしむる件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C04120764700、陸支受大日記（密）第12号 3/3 昭和14年自3月22日至3月25日（防衛省防衛研究所）

2月21日、スチュアートはアメリカ国務長官のハルに電報を送り、王克敏からの情報を伝えた。それによると、東京から戻った喜多誠一が日中和平の条件を提案していた。具体的には、(1) 汪兆銘が新たに設立される南京国民政府の首脳に就任するが、新政府には蒋介石を含めることができる(2) 日本は華北に軍を駐留させ続け、名目上「経済協力」をも維持する(3) 日本軍は華中・華南から段階的に撤退する、というものであった。そして、英米両国がこの行動を2、3カ月以内に承認する必要があるとされた。しかし、スチュアートはハルに対し、これは英米の存在を排除し、事実上華北を併合するための策略であり、アメリカがすべきことは中国の抵抗を支援することだと伝えた⁵⁸。スチュアートは、王克敏と同様に、日本の汪兆銘工作を非常に嫌っていた。

4月17日、スチュアートは香港で全国基督教大学会議と中華教育文化基金会の年会に出席し、大公報の記者に対して、日本人は無実の燕大の学生を捕らえているが、燕京大学の原則は学問の自由と中国の立場を堅持することにあると語った⁶⁰。5月、スチュアートは昆明と重慶を訪問した。おそらく、数カ月前からアメリカ政府が戦争調停に冷淡であり、日本の汪兆銘工作も蒋介石に対抗して進行していたため、スチュアートは日中和平の話し合いを行わなかった。

それどころか、スチュアートは蒋介石に対し、中国が日本に完全に華北を支配されるのを避けるためには、中央政府軍と共産党の八路軍を統一指揮し、この夏に河北中部の占領された多数の県城を奪回する必要があると提案した⁶¹。また、蒋介石夫妻と面会した際、スチュアートは日本の激しい空襲を目の当たりにし、瓦礫の山や焼け焦げた死体にショックを受けた一方で、侵略に直面した際の蒋介石と中国人民の不屈の精神と勇気に感銘を受けた。スチュアートは、日本の非人道的な行為を強く非難し、アメリカが日本に戦争物資を売却していることに深い失望と怒りを表明している。北京に戻った後、スチュアートは5月25日に蒋介石に手紙を送り、(1) 重慶訪問後、彼は中国全土が長期抗戦の決意と能力を持っていると確信したこと、(2) 王克敏は辞職を望んでおり、汪兆銘の「偽」中央政府の設立を阻止することを提案していることを伝えた⁶²。

2.3 : 「厭わしい」汪兆銘工作 : 第3、4回の蒋介石訪問 (1939年7月~1940年4月)

7月初め、日本軍はすでに燕大を華北における反日と共産主義の最後の砦と見なしていた。日本当局との関係を維持するために、スチュアートは最終的に、ハーバード・燕京学社に所属し、温厚な性格を持つ考古学者である鳥居龍蔵教授を採用した。スチュアートは、鳥居の加入が国際的な理想主義の試みであり、この行動によって日中両国の友好と相互理解が促進されることを期待していた⁶³。

スチュアートにとって慰めとなったのは、南方各地で多くの燕大の校友が政府や生産部門で忠実に中国に奉仕していることだった⁶⁴。スチュアートの南下の目的の一つは、学生が愛国活動に参加する機会を見つけることである。燕大の学生は、日本の支配下にある華北で働きたくなかったため、スチュアートは燕大の学生輔導委員会に委託して、抗日運動に参加したい学生を上海や香港経由で国民政府

⁵⁸ Stuart to Trustees, February 21 1939, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5535, 758-760.

⁵⁹ Stuart to Hull, February 22 1939, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5535, 762.

⁶⁰ 在上海総領事三浦義秋発在北京大使館参事官堀内干城宛、1939年5月2日発、「7. 燕原大学校長「スチュアート」ノ香港大公報記者ニ対スル談話要領訳報ノ件 昭和十四年五月」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B05016177100、参考資料関係雑件/学校及学生関係 第七卷 (H. 7. 2. 0. 4-1_007) (外務省外交史料館)

⁶¹ FRUS, 1939, III, "The Chargé in China (Peck) to the Secretary of State", Chungking, May 15, 1939, Document 157, 727-728.

⁶² 「司徒雷登函蔣中正在北平会晤王克敏商談中日戦争与汪兆銘偽政權事」(1939/05/25), 〈敵偽組織 (二)〉, 《蔣中正總統文物》, 国史館藏, 數位典藏号: 002-080103-00010-031。

⁶³ Stuart to Trustees, July 3 1939, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5537, 854-825.

⁶⁴ Stuart to Trustees, May 5 1939, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5537, 815-825.

支配地域に送る手配をした（通称「南下」）。さらに、西方の共産党の根拠地に向かう学生（通称「西游」）も、スチュアートは暗黙のうちに認めていた⁶⁵。

7月には、中国共産党北方分局社会部との関係を通じて、燕京大学発電所の肖田などの共産党員や燕大の教員であるラップウッド、バンド、リンゼイらが晋察冀抗日根拠地に潜入し、共産党に通信機器や医療器具を提供した⁶⁶。当時、リンゼイはスチュアートと燕大の臨湖軒で一緒に住んでおり、スチュアートはこの計画を知っただけでなく、外交特権のある車を提供してリンゼイの共産党拠点への移動を助けていた⁶⁷。この後、スチュアートも、ラップウッドによる晋察冀共産党根拠地に関する報告を珍しく保存した——八路軍が民衆に非常に友好的で、税負担を大幅に軽減しており、真に「人民の軍隊」であると述べられていた。1200万人以上の住民が政府と積極的に協力し、共産党政府も著しい民主的特徴を示しており、土農工商、女性、僧侶などあらゆる階層が選挙に参加でき、一部の地域では60%の女性が投票権を持っていたという⁶⁸。この際、スチュアートにとって、日本への抵抗こそが最優先事項であり、すでに共産党に対して積極的な態度を示していた。

一方、スチュアートが蒋介石を対象とした和平工作は、明らかに汪兆銘工作の消極的な影響を受けている。1939年7月15日、国民政府の高官である孔祥熙によると、宋美齡が再びスチュアートを重慶に招待した。アメリカ側も、王克敏や喜多誠一がスチュアートの訪問を和平交渉に関連する情報伝達の手段として見ていることを理解していた⁷⁰。スチュアートは、陸軍大臣の土肥原賢二が汪兆銘工作を策謀したが、華北の喜多誠一は中国政府と直接交渉することを主張しており、道徳的義務、国家利益や理想主義の観点から、アメリカは日本の過激派を阻止し、日本国内の自由主義勢力を強化すべきだと理事会に伝えた⁷²。スチュアートの見解では、王克敏の後ろ盾である喜多誠一は、すでに日本自由派の代表格となっていた。

7月、スチュアートは重慶に到着し、三分の一の建物が破壊され、大部分の市民が周辺の県に疎開していることを目の当たりにした。同時に、中国の通貨は暴落し、財政部長の孔祥熙はその対応に全力を注いでいた。また、アメリカが日米通商航海条約を廃止したというニュースは、重慶の官僚たちを大いに喜ばせた⁷³。7月19日、スチュアートは燕大理事会に手紙を送り、汪兆銘工作は日本のもう一つの陰謀であり、中国を内戦に陥れるものであると述べた。しかし、スチュアートは蒋介石が中国を裏切ることはないと確信していた⁷⁴。アメリカ政府はスチュアートが個人的に和平交渉を行うことに常に批判的であったが、重慶側はスチュアートを弁護していた——7月20日、国民党中央宣伝部副部長の董頭光が駐中国大使ジョンソンを訪ね、「指示（明らかに蔣からの指示）を受け説明する」と述べ、スチュアートが重慶に来たのは和平交渉のためではなく、汪兆銘政府の設立を防ぐ方法を協議するためであり、また王克敏を北京から逃がすためだと説明した。董は、日中間のいかなる和平交渉もアメリカ政府に通知されると明言している⁷⁵。こうして見ると、蒋介石は、親友であるスチュアートがアメリカ政府から嫌われることも、またアメリカ政府が自分を、密かに日本との和平を画策していると疑うことも、望んでいなかったことが分かる。

⁶⁵ 侯仁之《燕京大学被封前後的片段回憶》《燕大文史資料第三輯》（北京：北京大学出版社、1990年3月）、121-127。John Leighton Stuart, *Fifty Years in China—The Memoirs of John Leighton Stuart, Missionary and Ambassador*, RANDOM HOUSE, New York, 1954:129.

⁶⁶ 張大中《我經歷的北平地下党》（北京：中共党史出版社、2009）、9。

⁶⁷ 李効黎《記司徒雷登、夏仁德二三事》《燕園鐘聲》（燕京大学1937-1941年五班聯合紀念刊）1993年、124。

⁶⁸ Interview with Lord Michael Lindsay, April 1975, Notre Dame, Indiana. Cited from Dwight W. Edwards, *Yenching University*.

⁶⁹ Report from Lindsey, September 2 1939, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5539, 932.

⁷⁰ FRUS, 1939, III, “The Counselor of Embassy in China (Lockhart) to the Secretary of State”, Peiping, July 15, 1939, Document 171, 807-808.

⁷¹ Stuart to Garside, July 15 1939, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5538, 879.

⁷² Stuart to Trustees, July 3 1939, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5537, 854-825.

⁷³ Stuart to Trustees, July 30 1939, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5538, 904-907.

⁷⁴ Stuart to Trustees, July 19 1939, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5538, 897-900.

⁷⁵ FRUS, 1939, III, “The Ambassador in China(Johnson) to the Secretary of State, Chungking”, July 21, 1939, Document 173, 815-816.

7月23日、ジョンソン大使はスチュアートと面会し、スチュアートが和平提案を持って重慶に来たわけではないことを確認した。スチュアートは、日本の汪兆銘工作が日本提供の税関資金を用いて重慶から支持者を誘い出し、その後蒋介石との内戦を引き起こし、最終的には第三国政府に南京の偽政権を承認させることが目的であると強調している⁷⁶。実際、ジョンソンに自身が和平条件の伝達者である事実を隠したのは、スチュアートが自身を守るための手段であった。7月24日、スチュアートは蒋介石夫妻に面会したが、蔣の日記によれば、その場で「華北偽政権」に関する議論が交わされたとされる⁷⁷。しかし実際のところ、スチュアートは蒋介石と和平について確かに議論しており、ただその全部の内容は明らかになっていない。8月中旬、北京に戻ると、スチュアートは王克敏を訪問し、蒋介石の和平条件を伝えた、「蔣は日本と直接和平を模索する考えであり、汪兆銘を徹底的に排除する意向である。日本が公正な条件を提示するならば、国民政府は政治部長の張群を派遣して、王克敏や日本と協議を行う準備がある。」⁷⁸同じく8月、スチュアートの助手である傅涇波が蒋介石に手紙を送り、スチュアートが王克敏らに愛国的な思想を植え付け、蕭正誼を東京に派遣して日本の権力者に対して、本当の和平を実現するには蒋介石と交渉するしかないと言っていることを伝えた⁷⁹。蒋介石への支持から、スチュアートの和平工作は汪兆銘の排除を前提としていた。

9月1日、スチュアートは、アメリカが戦争に巻き込まれることなく、貿易圧力を安易にかけることで日本を「覚醒」させ、日本国内の自由派が軍事派に勝利すると確信していた⁸⁰。9月13日、スチュアートは北京大使館のロックハートに、王克敏の和平提案を孔祥熙に転送するよう依頼したが、アメリカに不利な結果になることを恐れたロックハートはこれを拒否した⁸¹。9月14日、スチュアートは王克敏を訪れ、13日のアメリカ大使館の書簡を持参して次のように説明した、「私の和平工作の背後には、蔣に対する米英の圧力（援助の停止を指す）が存在している。それは、蔣が共産化の道を進むことを防ぎ、ソ連勢力の拡大を阻止するために、蔣と日本が相互に妥協し、中国の和平を回復することを望んでいることを意味している。」これらの情報について、王克敏は毎回、喜多誠一に報告していたため、喜多は汪兆銘への対応を9月まで遅らせる計画を立てるほどであった。汪兆銘は、スチュアート工作を重慶側の策略であると断定し、この和平工作を停止するよう要求した。南京で参謀本部第2部長の樋口季一郎も「スチュアートのような者は、常習的な嘘つきだ。今、汪を無視する態度を取れば、日本の武士道は無意味になる」と述べ、汪を支持する立場を明確にした⁸²。

挫折に直面しながらも、10月、スチュアートは、「日本は中国を征服するか、和平条約を結ぶかのどちらかである。中国政府は早すぎる和平は侵略を合法化し、将来の紛争の種をまくだけだと完全に認識している。アメリカの経済圧力は、日本国内の穏健派や自由派の台頭を促し、将来的には九カ国条約や日米航海通商条約の復活が日米中の協力を促進するだろう」と理事会に述べた⁸³。明らかにスチュアートは、華北の日本軍と蒋介石を対象とした和平工作をまだ諦めていなかった。

1940年2月、蕭正誼が東京から戻り、スチュアートに、海軍の指導者（米内光政）の下、陸軍と海軍の亀裂が目立ち、陸軍内部にも分裂があることを報告した。また、戦争は日本の経済や国民生活に

⁷⁶ FRUS, 1939, III, "The Ambassador in China (Johnson) to the Secretary of State", Chungking, July 24, 1939, Document 174, 727-728.

⁷⁷ 蒋介石《蔣中正日記》、1939年7月24日、99。

⁷⁸ 防衛庁防衛研修所戦史室編「戦史叢書第090巻 支那事変陸軍作戦<3>昭和十六年十二月」「第一章 欧州戦争勃発に伴う支那事変処理」（東京：朝雲新聞社、1975）、27-28。

⁷⁹ 「傅涇波函蔣中正自与司徒雷登到北平後極力勸説王克敏以民族大義为重併派人赴東京遊説近衛文麿等人勿扶持汪兆銘偽政權等情事」（1939/00/18）、《敵偽組織（二）》、《蔣中正總統文物》、国史館蔵、數位典藏号：002-080103-00010-032。

⁸⁰ Stuart to Trustees, September 1 1939, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5539, 928-931.

⁸¹ FRUS, 1939, III, "The Counselor of Embassy in China (Lockhart) to the Secretary of State", Peiping, September 11, 1939, Document 217, 989-991.

⁸² 「戦史叢書第090巻 支那事変陸軍作戦<3>昭和十六年十二月」（東京：朝雲新聞社、1975）、27-28。

⁸³ Stuart to Trustees, October 14 1939, JLS-RYU. Box: 359, Folder: 5539, 966-968.

深刻な影響を与えており、食糧不足や商業状況の悪化が進んでいた。さらに、汪兆銘は非常に悲観的な気持ちを抱いており、ある冷静な日本の指導者は、アメリカの経済的圧力により、日本にはアメリカの要求を満たすか、武力対決を行うかの二つの選択肢しかない結論付けた。スチュアートは、自分が華北の日本人に対して、蒋介石が唯一受け入れられる条件は、日本軍が全面撤退し、中国の主権独立を認めることであると述べたと書き記している。日本側はスチュアートに仲介役を求めたが、スチュアートはまだ和平交渉の時期ではなく、中国が辛抱強く抵抗を続ける必要があると考えた⁸⁴。

この時、スチュアートは華北を離れ、一連の教育会議に出席する予定であった。スチュアートは和平の実現が困難であることを知っていたにもかかわらず、2月26日に華北の日本軍に対し、重慶が和平委員会を組織し、王克敏を委員長に据えて日中間の調停を行うよう提案した。同日、喜多誠一は東京に報告し、スチュアートによれば蒋介石は次のような8つの和平条件を提示したと述べた、(1) 日本は蒋介石を交渉相手とする。(2) 近衛三原則（善隣友好、共同防共、経済提携）を和平の基本条件とする。

(3) 華北と蒙疆の共同防衛が必要であるが、日本の駐留を意味しない。(4) 経済協力の範囲を調整する必要がある。(5) 文化提携は実施でき、教科書の改革に努力するべき。(6) 日本は撤退を基本原則とし、華北と蒙疆には一時的に駐留可能である。(7) 経済提携のための委員会を設置する。(8) 欧米諸国と友好関係を維持する必要がある。また、満洲問題は平和的に解決する必要がある⁸⁵。

この時点で、親日の南京国民政府の設立準備を進めており、参謀本部次長の多田駿は汪兆銘グループの周仏海に指示して、2月12日にスチュアートに日本の条件を伝えた、(1) 蒋介石が誠意を示し、共産党を排除し、重慶政府内の共産主義者を粛清すれば、汪兆銘と協力することが可能である。(2) 蔣が汪兆銘と直接交渉することが望ましく、汪がその意向を日本側に伝えることができる。2月24日、周仏海はスチュアートに対して、南京中央政権の結成が和平の障害になるわけではないとし、蒋介石が日本の現在の困難を軽視せず、個人的な感情で大局を損なうことのないように説得してほしいと頼んだ⁸⁶。3月、スチュアートが貴州と重慶で行われるロックフェラー財団主催の農村復興会議に参加する前に、王克敏も再びスチュアートに華北日本軍の新たな条件を伝えた、(1) 蒋介石が共産党を討伐するなら、汪兆銘は彼と協力する。(2) 蒋介石が和平交渉を望むなら、汪兆銘または王克敏と特使を派遣して会談することができるというものだった⁸⁷。華北でも南京でも、どちらの陣営の条件も汪兆銘に言及しており、これは日本と直接交渉を望む蒋介石にとって到底受け入れられるものではなかった。

3月5日、スチュアートが香港に到着すると、蒋介石の部下である賀耀組が蔣に伝えた、「スチュアートが重慶に来るのはロックフェラー財団の活動のためであり、和平工作ではない。日本の軍国主義が弱体化し、穏健派が権力を握った後に初めて交渉が可能になる。スチュアートはホワイトハウスに出入りしており、ローズベルトに大きな影響力を持っているため、スチュアートを通じて中国の立場を伝えることができるが、仮にアメリカ大統領が調停に乗り出す場合でも、中国に有利な条件を考慮しなければならない。そして、スチュアートが今回重慶に来たのは喜多誠一の依頼を受けて和平条項を探るためでもあるため、警戒が必要である。」⁸⁸このように、重慶はスチュアートの伝言を正式な和平交渉とは見なしていなかったが、スチュアートを通じて中国の意思をアメリカに示すことは、確かに重慶の計算に含まれていた。

⁸⁴ Stuart to Trustees, February 12 1940, JLS-RYU. Box: 360, Folder: 5541, 41-43.

⁸⁵ 防衛庁防衛研究所戦史室編「大本営陸軍部<2>昭和十六年十二月まで」「第二章 好機南進・三支那事変解決ための努力」（東京：朝雲新聞社、1968）、29-30。

⁸⁶ 蔡徳全編注《周仏海日記（上）》（北京：中国社会科学出版社、1986年）、1940年2月12日、2月24日、245、251。

⁸⁷ Stuart to Trustees, April 5 1940, JLS-RYU. Box: 360, Folder: 5541, 60-67. FRUS, 1940, IV, “Dr. J. Leighton Stuart to President Roosevelt”, Hong Kong, April 10, 1940, Document 357, 1367-1369.

⁸⁸ 「賀耀組等電蔣中正燕京大学校長司徒雷登在港談話及其來重慶任務等情報提要等二則」（1940/03/05）、〈一般資料—呈表彙集〉、《蔣中正總統文物》，國史館藏，數位典藏号：002-080200-00527-035。

同月、ロックフェラー財団の資金援助により、スチュアートは、日本軍の空襲と戦時政策により国民の苦境が深刻化した戦時下の貴州省の後進的な状況を目撃した。重慶では、蒋介石とスチュアートが3度面会し、蔣は、すべての問題は外交交渉によってのみ解決されるべきであり、和平妥協では解決できないと述べ、5年にわたる抵抗の準備ができていと語った。スチュアートは後に、「アメリカが調停しない限り、中国は明らかに和平交渉を考えないだろう」と書き記した⁸⁹。スチュアートは国共両党の指導者や社会の各界の人々と会った後、3月19日に在重慶アメリカ大使館に報告し、日本の和平条件は戦争を続けるよりも悪いため、蒋介石は和平交渉を拒否したことを伝えた。彼の南方視察の中で、和平交渉を望む政府官僚、知識人、市民は見つからなかった⁹¹。

3月30日、汪兆銘政府が南京で成立を宣言し、スチュアートの和平の希望に打撃を与えた。4月10日、スチュアートは香港でローズベルトに報告し、多くの日本人が和平交渉を求めて接触してきたが、スチュアートは一貫して、日本は蒋介石が受け入れることのできる条件を提示し、日本を代表する人物が交渉に臨むのでなければ、交渉は無効であると答えていたと述べた。蒋介石は、アメリカ大統領が調停に乗り出す場合のみ交渉を考えるが、ローズベルトが介入したとしても、すぐには和平交渉に応じるつもりはないと語っている——スチュアートの解釈では、蔣は日本が中国の条件を受け入れるほど絶望していないと考えており、そのため中国は闘争を続ける方を選んでいるというものであった。また、スチュアートはローズベルトに対し、対日禁輸、対中借款、対中不平等条約の廃止を提案した⁹²。ローズベルトはこれに返答しなかったが、スチュアートは4月20日にアメリカ政府が中国に2000万ドルの貸付を行ったことにおそらく喜んだだろう。

3. 理想と現実の狭間

3.1 : 和平熱意の減退：上海への旅(1940年4月～1941年1月)

1940年4月17日、宋子文は蒋介石に宛てた書簡で以下のように述べている、「昨日、傅涇波兄（スチュアートの助手）が香港を訪れ、王克敏から次のような話を伝えた。日本軍の統制派は依然として汪政権の組織に対して妥協しない態度を取っており、彼ら自身も破壊工作を進めている。また、王克敏の知る限り、日汪条約は極端に国権を損なうものであるため、何らかの方法を模索して汪政権を打倒し、日本と改めて比較的平等な条約を締結すべきだと考えている。その可能性があるならば、王は重慶に赴き、条約の締結に臨む用意さえあるとのことである。」王克敏が、汪兆銘政権の成立を何としても阻止したい。

しかし、日本が撤兵の意図を示さない中、蒋介石は和平交渉を拒否する信念を貫いていた。4月21日、蒋介石は宋子文に返信した、「傅が伝えてきた意図について、彼に対し、今後決して架橋（仲介）する意図を持たないように伝えてほしい。この意図はすでにスチュアート校長に直接詳しく伝えてある。傅は重慶に来るべきではない。また、この件については話さないように。」⁹³

同じく4月21日、汪兆銘政権に批判的な態度を抱きながら、スチュアートは次のように記した、
「日本は東アジアの人民を解放することを目的としていると主張しているが、実際には中国を搾取し、圧迫しており、中国人民の憤りを引き起こしている。現在、日本は対中戦争を終わらせることに

⁸⁹ 蒋介石《蔣中正日記》、1940年3月8日、3月10日、3月26日、3月28日、37-38、45。

⁹⁰ Stuart to Trustees, April 5 1940, JLS-RYU. Box: 360, Folder: 5541, 67-69.

⁹¹ FRUS, 1940, IV, "The Ambassador in China (Johnson) to the Secretary of State", Chungking, March 19, 1940, Document 337, 1291-1292.

⁹² FRUS, 1940, IV, "Dr. J. Leighton Stuart to President Roosevelt", Hong Kong, April 10, 1940, Document 357, 1367-1369.

⁹³ 「宋子文呈蔣中正有關王克敏以汪日所訂條約喪失國權欲覓途徑推翻汪兆銘政權」(1940/04/17), 〈革命文獻-偽組織動態〉, 《蔣中正總統文物》, 國史館藏, 數位典藏號: 002-020300-00003-047。

急いでいるが、中国は依然として粘り強く抵抗している。中国が長城以南に駐留するすべての日本軍を撤退させる前に、和平交渉を行うことはできない。蒋介石と傀儡指導者（汪兆銘と指す）の根本的な違いは、後者が当初から敗北主義者であり、その精神はまだ清国の士人の水準にとどまっているのである。アメリカは、日本の中国に対する支配権を認め、伝統的な責任を放棄するか、あるいは門戸開放政策を堅持するか、どちらかを選ばなければならない。したがって必要なのは、(1) 和平交渉を協議するための正式な機関を設立すること。(2) 日中経済協力を促進すること。(3) 日本は中国から直ちに撤退し、同時に満洲問題を解決すること。(4) 日本軍の華北駐留は、中国の承認を得ること。(5) 日米貿易関係を回復し、日本の自由主義的な要素を強化することである。」⁹⁴

4月末、スチュアートは上海に到着し、汪兆銘政権の行政院副院長である周仏海に、蒋介石の和平に対する意見を伝えた。周仏海は当初、蒋介石が和平に応じることに喜んでいたが、28日にスチュアートと2時間会談した後、彼は大いに失望し、蒋介石が依然として汪兆銘を理解せず、大局を無視して感情に流されていると感じた。スチュアートはアメリカが仲介に乗り出せば蔣が受け入れる可能性がある」と述べたが、周仏海は依然として前途を悲観的に見ていた⁹⁵。

その後、和平活動家であり、基督教徒でもある田川大吉郎もスチュアートと会談した。田川が陸軍大臣の畑俊六に提出した会談の概要は次のとおりである、(1) 蔣は日本が近衛声明を実行しておらず、中国を服従させようとしているが、中国の独立を承認し、主権を尊重する意思はないと考えている。

(2) 蔣は、日本が撤退しない間は中国で和平を実現できないが、和平交渉に着手しないとは言っていないと述べた。(3) 蔣は近衛声明に基づいて事態を收拾することを望んでいる。(4) 蔣は和平を望んでいる。(5) スチュアートは、日中が平等でなければ和平は成立しないと考えている。(6) 蔣は蒙疆と華北に期待していない⁹⁶。蒋介石の条件は、日本にとって実現が難しいものである。

汪兆銘を支持する勢力は、依然として強い。5月2日、アメリカの駐日大使グルーは外務大臣の有田八郎に対し、正確性は保証できないが、スチュアートが伝えた蒋介石の和平条件は次のようなものであったと伝えた、(1) 中国は長城以南で完全に独立する。(2) 満洲問題は解決を待つか、交渉の議題とする。(3) アメリカ大統領が仲介する。これは、スチュアートの情報がアメリカの外交政策決定者に一定の影響を与えていることを示している。しかし、5月3日、有田はグルーに対し、日本政府は汪兆銘政権を全力で支援し、蒋介石とのいかなる交渉も汪政権を通じて行わなければならないと伝えた。しかし日本は、たとえば香港での和平交渉の可能性を放棄することはないとも述べた⁹⁷。このように、日本の条件も同様に、蒋介石にとっては過度に厳しいものであった。

7月、日本の高官の一人がスチュアートに対し、日本は蒋介石との交渉意欲を公には示したくないため、重慶への爆撃を続けていると語った。同時に、アメリカは対日禁輸を実施し、石油供給を制限した。スチュアートは、アメリカの対日禁輸と対中援助は世界情勢に大きな影響を与えており、燕京大学の運命は世界情勢と密接に関わっているとコメントした⁹⁸。8月、東京から戻った蕭正誼はスチュアートに、「日本の親枢軸派が優勢であるが、ドイツやイタリアがどれだけの援助を提供できるかは不確実であり、また、英米からの圧力は壊滅的なものである。南進は日本の夢であったが、日中戦争が日本の歩みを鈍らせていた」と報告した。同時に、蒋介石の部下の一人はスチュアートに対し、汪兆

⁹⁴ Memorandum on the Japanese Invasion of China from the standpoint of American concern, April 21 1940, JLS-RYU. Box: 360, Folder: 5541, 46-49.

⁹⁵ 蔡徳全編注《周仏海日記（上）》、1940年4月25日、4月28日、285-287。

⁹⁶ 「大本営陸軍部<2>昭和十六年十二月まで」「第二章 好機南進・三 支那事変解決ための努力」29-30。

⁹⁷ FRUS, 1940, IV, "The Ambassador in Japan(Grew) to the Secretary of State", Tokyo, May 3, 1940, Document 364, 1393-1399.

⁹⁸ Stuart to Trustees, July 6 1940, JLS-RYU. Box: 360, Folder: 5542, 114-117.

銘が非常に落胆しており、前陸軍大臣の板垣征四郎も、日本軍の総死傷者数が約150万人に達し、毎月戦争に15億円以上を費やしているため、日中戦争は終結せざるを得ないと述べた⁹⁹。

9月27日、日独伊の代表が三国同盟条約に署名することとなった。この条約は、日本内部の分裂を際立たせ、再び軍事的過激派が主導権を握っていることを示しているとスチュアートは考えた。スチュアートは、アメリカが中国の復興を支援し、日本とより良好な関係を築き、極端な悪である軍国主義に対抗することを望んでいた¹⁰⁰。10月19日、アメリカ政府は日本に対する鉄鋼の禁輸を発表した。スチュアートは、日本の侵略政策に根本的な変化が起こるまで、アメリカが禁輸をさらに強化することを望んでいた。わずかな可能性ではあるが、禁輸の強化が日米戦争を引き起こすとしても、この戦争は将来の紛争よりも早く、容易に終結するだろうと考えていた。

禁輸の影響によって、11月、協和医学院、輔仁大学、燕京大学が華北から撤退するという噂が広まっていた。しかし、スチュアートは、北京には反米感情の兆候がほとんどなく、城壁に貼られた小さなポスターの焦点は、共産主義への反対であり、アメリカへの反対ではないことに気付いた。また、スチュアートは、日本の北支事務局が必要な場合には燕大を「接收」するとの確かな情報を得ていたが、日本はアメリカを過度に挑発するつもりはなく、また歴史的に重要な都市である北京で深刻な混乱を引き起こして国際的な注目を集めることも望んでいないと判断した¹⁰¹。

11月25日、スチュアートは蒋介石夫妻に手紙を送り、宋美齡には「日本の条件が高すぎるため、蒋介石が和平交渉を拒否するのは合理的であり、時がくれば自然に成就するだろう」と伝えた。一方、蒋介石には次のように述べた、(1)日本の御前会議は香港で和平交渉を行うことを決定した。(2)御前会議はインドシナを占領し、必要に応じてタイやビルマに侵攻することを決定した。(3)天皇は日満汪共同宣言に署名するよう促されているが、12月5日までは公表されない——おそらく香港での和平交渉の結果を待っているのであろう¹⁰²。

12月9日、重慶との連絡ルートを開くために、外務省官僚の田尻愛義が北京を訪れ、スチュアートに松岡洋右が蒋介石と香港で和平交渉を行おうとしているが、蔣がこれを拒否したことを伝えた——その背景には、11月30日には、「三国」が互いに承認し合い、東亜新秩序の樹立を目的とした日満汪共同宣言が締結されたことがある。スチュアートは田尻に対して、蔣は日本軍が中国から全面撤退しない限り和平交渉には応じないと考えており、さらに次の点を挙げた、(1)日本側のこれまでの行動から、蔣は日本の交渉代表を信頼できない。(2)蔣は、日本代表が国策を代表する権限を持っているかどうかを確認できない。スチュアートはまず、日本が汪兆銘政権を承認しても意味がないと批判し、次に中国問題を解決するためには、日本は武力によって中国を征服するか、あるいは中国の領土と主権の完全性を尊重し、合法的に中国で利益を得るかのどちらかであると述べた。日本はこれらの二つの方法を組み合わせ、両方の利益を得ようとしているが、これは失敗する運命にある。日本が後者の政策を採用すれば、アメリカとの友好関係を維持できるとスチュアートは主張した¹⁰³。

1941年1月、王克敏の後任であり、広く認められている真の傀儡である王揖唐がスチュアートと会談し、中国の勝利を強く望んでいることを伝えた。スチュアートは、日本と協力する中国人たちはますます失望しており、漢奸の多くは意識的な裏切り者ではないと判断した¹⁰⁴。1月下旬、国際情勢の緊

⁹⁹ Stuart to Trustees, August 20 1940, JLS-RYU. Box: 360, Folder: 5542, 132-134.

¹⁰⁰ Stuart to Trustees, September 28 1940, JLS-RYU. Box: 360, Folder: 5542, 165-166.

¹⁰¹ Stuart to Trustees, October 19 1940, JLS-RYU. Box: 360, Folder: 5543, 176-179.

¹⁰² 「司徒雷登函蔣中正宋美齡國際局勢於中国有利堅拒和議甚為合理及卡爾呈蔣中正日御前會議決發働集中全力之和平攻勢王克敏赴平等」(1940/11/25), 〈和平醞釀 (七)〉, 《蔣中正總統文物》, 國史館藏, 數位典藏号: 002-080103-00033-012.

¹⁰³ FRUS, 1940, IV, "The First Secretary of Embassy in China(Smyth) to the Secretary of State", Peiping, December 11, 1940, Document 490, 1911-1914.

¹⁰⁴ Stuart to Trustee, January 14, 1941, J.L.S.-RYU, Box: 360, Folder: 5545, 265-268.

張が高まる中、日本は華北の文教政策を調整した。具体的に、「東亜新秩序」の建設を主要な目標とし、徐々に第三国系大学を日本と協力させ、基督教系の学校に対して恩威併用の方法を採用し、日本人教員の採用や日本語の授業の増加などの措置を段階的に強化している¹⁰⁵。一方で、日本軍は華北における「思想戦」において、反米英の内容を強化していた。英語、共産主義思想、自由主義思想に代わるものとして、日本は日本語や東亜新秩序の理念など、日本のイデオロギーを推進した¹⁰⁶。

このような中で、日本が燕大に対して厳しい態度を取るのには、必然の結果であった。1月、スチュアートは、日本がアメリカを孤立させ、華北から撤退させようとしていることを記録している、「日本は北京に反米・反西洋のスローガンを多数作成しており、400名の日本の特務工作員が北京に入り、城内の西洋人の動きを監視している。小学校や初等教育においては、英語教育が減少し、日本語の学習が強制されていた。また、日本は突然、燕大生の就職を禁止した。さらに、70名以上の学生が反日デモ中に商店を襲撃し、そのうち8名の燕大生が日本軍によって逮捕された。」スチュアートはますます、日本が成功すれば、華北は満州国や朝鮮と同じ抑圧的な植民地支配を受けることになるだろうとますます強く認識するようになった¹⁰⁷。

3.2：日米戦争前夜：重慶への最後の旅（1941年1月～1941年12月）

1941年、日米の衝突がますます差し迫り、中国での壊滅的な戦争も数年にわたり続いていた。1月初め、日本人が北京のあるカフェで意図的に挑発し、それを口実に5人のアメリカ海兵隊員を逮捕した。スチュアートは在北京アメリカ大使館に、日本がすでに新民会にこの策略を広めており、華北でのアメリカの存在を完全に支配できることを中国人高官に信じさせようとしていると伝えた¹⁰⁸。

同月、スチュアートは日米開戦の可能性が急速に高まっていると判断した。日米交渉に携わっている駐米大使の野村吉三郎が北京に滞在中、スチュアートに「何故あなたたちアメリカ人は蒋介石を支援し、戦争を長引かせるのか」と尋ね、スチュアートは「アメリカも日本に大量の物資を売っている」と答えた。野村はさらに「アメリカ政府は共産主義に対してどのような態度を取っているのか」と問い、スチュアートは、野村は華北の具体的な状況を問うべきで、無意味な質問をするべきではないと内心思った。後に、駐米公使の若杉要もスチュアートを訪れ、日米戦争をどのように防ぐかを尋ねた。同じく、若杉はまずアメリカの対中支援について尋ね、スチュアートは反論する意味はないと考えた。若杉は次に共産主義について問うたが、スチュアートは中国の共産主義は希釈されたものであり、日本が反共を議論することはできるが、その前提は中国の独立と解放であると答えた。スチュアートは、野村を反動的な人物と見なし、アメリカの東亜新秩序への干渉を阻止しようとしていると考えた¹⁰⁹。実際、中国（特に華北）の共産化と対米戦争は、日本が最も避けたかった事態であり、これが日本の外交官たちが共産主義問題にこれほど関心を持っていた理由である。

1月21日、スチュアートはアメリカ大使館に、大本営参謀部総長の板垣征四郎が自分を会談に招待したが、蒋介石の立場を考慮すると、いかなる議論も成果を生むことはないだろうと伝えた。板垣がこのような行動を取ったのは、1937年の夏に東京を説得して中国侵略を開始させた責任を感じている

¹⁰⁵ 北支那方面軍参謀長笠原幸雄発隸下兵団参謀長・各特務機関長宛、1941年1月6日発、「中国ニ於ケル諸外国ノ伝道及教育関係雑件 11. 在北支英米系基督教会ノ処理ニ関スル件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B04012580500、中国ニ於ケル諸外国ノ伝道及教育関係雑件（I-2-3-0-1）（外務省外交史料館）

¹⁰⁶ 「昭和十六年度思想戦指導要領」北支那方面軍司令部、1941年6月14日付（『昭和16年度思想戦指導要領』防衛庁防衛研修所戦史室：支那-支那事变北支-42、JACAR:Ref. C11110956500）。

¹⁰⁷ Stuart to Trustee, January 14, 1941, J.L.S.-RYU, Box: 360, Folder: 5545, 265-268.

¹⁰⁸ FRUS, 1941, V, "The First Secretary of Embassy in China(Smyth) to the Secretary of State", Peiping, January 3, 1941, Document 510, 1949-1954.

¹⁰⁹ Stuart to Trustee, January 14, 1941.

からだという¹¹⁰。1月上旬、国共両党の軍が安徽省南部で武力衝突し、いわゆる皖南事変が発生した。1月29日、日本の在北京大使館参事官の土田豊がスチュアートに対し、蒋介石が共産党の新四軍の編成を取り消したことは、日本にとって好影響を与えると語った。スチュアートは皮肉交じりに「日本が中国の共産主義が和平の障害だと確信しているならば、重慶の立場から見て、汪兆銘政権は別の反乱政権であり、完全に日本の軍事力によって創設され維持されているため、少なくとも中国の共産主義と同様に、和平の重大な障害である」と返答した。また、スチュアートは、和平問題は東京で解決すべきであり、重慶との交渉ではないと付け加えた。土田はスチュアートの意見に穏やかに同意したが、東京を説得するのは難しいだろうとも述べた¹¹¹。

2月13日、上海での会談において、板垣征四郎はスチュアートに対し、日本は中国と長期的な和平を結びたいと考えており、ローズベルト大統領が日中双方の面子を保ちながら戦争を終結させることを検討してほしいと述べた。南京で開催された軍事会議で、18人の高級日本軍将校が、蒋介石政府を承認し、長城以南のすべての日本軍を撤退させ、中国の国家独立を保障することを条件に、日中戦争を早期に終結させることを望んでいると言った。スチュアートはロックハートに対し、もし日本が本当にそのように考えているなら、鍵は重慶ではなく東京にあると伝えた。板垣は、日中戦争の問題はすべて日米中の会議で解決できるとし、スチュアートに東京を訪れるよう希望したが、スチュアートは「蒋介石が指名しない限り行かない」と返答した。最後に、スチュアートはアメリカ政府が板垣の条件を検討することを望んでいた¹¹²。

2月18日、スチュアートは、板垣が和平を望んでいるが、日本国内での和平に対する見解は一樣ではないと判断した。スチュアートは、蒋介石とは親友であるが、日本の高官がしばしば日中和平問題について自分に相談してくるのは、自分が蒋介石に与える影響力を過大に評価しているからだと感じた。自分は一介の宣教師であり教育者であるが、人道主義と理想主義の観点から、日米中三国が友好関係を回復し、互恵的な利益を共有することを望んでいると述べた。また、スチュアートは、アメリカ政府が日本の拡張政策が変われば、日米通商航海条約や他の関係を回復し、これに感謝する日本人も多いだろうと考えていた¹¹³。2月24日、アメリカ政府が燕京大学を中国から撤退させる可能性を警告していることを伝えた。同時に、スチュアートのあるアメリカ人の友人は周仏海に、重慶は和平交渉に関心がなく、アメリカが戦争を調停する構想も実現する可能性が低いと述べた¹¹⁴。

3月、スチュアートは、日本がすぐにアメリカを刺激して戦争を始めることはないだろうと考えつつも、戦争に備えて準備を整えていた。スチュアートは、戦争が勃発した場合、華北にいる英米人がどこかに拘禁されるだろうと予想していた。そのため、戦争勃発後の三つの重要な点として、(1) 学問の自由、中国への忠誠、そして基督教の信仰を堅持すること。(2) スチュアートと華北政権の関係を利用して、燕京大学と協和医学院を中立国の機関に託すこと。(3) 燕京大学はすべての従業員に3か月分の給与を準備しており、外国人は残る道徳的義務はないことを挙げた¹¹⁵。

4月1日、スチュアートは在北京日本大使館の土田豊と再び会談し、土田は日中和平について再度尋ねたが、スチュアートは、日本が撤兵を保証するまで、蒋介石が交渉に応じることはないとして重ねて主張した。土田はアメリカの対中支援と国共両党の対立に関心を示したが、スチュアートは「国共の

¹¹⁰ FRUS, 1941, V, "The First Secretary of Embassy in China(Smyth) to the Secretary of State", Peiping, January 21, 1941, Document 516, 1977-1979.

¹¹¹ FRUS, 1941, V, "The Ambassador in China(Johnson) to the Secretary of State", February 4, 1941, Document 527, 2035-2037.

¹¹² FRUS, 1941, IV, "The Consul General at Shanghai(Lockhart) to the Secretary of State", Shanghai, February 14, 1941, Document 23, 161-162.

¹¹³ Stuart to Trustee, February 18, 1941, J.L.S.-RYU, Box: 360, Folder: 5545, 295-297.

¹¹⁴ 蔡徳全編注《周仏海日記(上)》、1941年4月24日、427。

¹¹⁵ Stuart to Trustee, March 13, 1941, J.L.S.-RYU, Box: 360, Folder: 5546, 318-319.

亀裂が中国の抵抗を終わらせることはない」と答えた。さらに、土田が「アメリカは日中の仲介役を務めるのか」と尋ねると、スチュアートは「アメリカは日中双方が望まなければ調停できないが、日本が撤退を保証すれば交渉は可能であり、選択権は日本にある」と答えた¹¹⁶。

4月2日、スチュアートは世界情勢についての見解を述べた、「日本は南方への進出が可能であるが、ロシアの政策における唯一の確実な要素がスターリンのヒトラーへの恐怖であるように、日本の政策を制約している唯一の要素はアメリカへの恐怖である。」スチュアートの構想は、アメリカ大統領の仲介によって日米中会議を開催し、太平洋の平和を実現することで、新たな世界秩序の始まりとすることだった。これが実現すれば、日本にとっては体面的な撤退であり、完全な敗北ではないと考えていた。また、国共の対立について、彼は争いが両党の公然たる決裂にはつながらないと予見し、共産党の抵抗の意思とその根拠地における人民の支持を無視できないとも述べた。さらに、アメリカが中国に対して不平等条約を廃止することにより、中国の士気を高め、日本に西洋帝国主義を非難する口実を与えないよう提案した¹¹⁷。アメリカの在北京大使館もこの条約廃止の提案に同意し、これを國務省に転送した¹¹⁸。

4月下旬、スチュアートは最も安全なルートで香港から重慶に到着し、戦時首都の高官や市民と面会した。スチュアートは珍しく、重慶の社会状況が悪化していることを記録していた、「生活費は急騰し、通貨は大幅に価値を失い、米の価格も暴騰し、さらには市民の暴動まで引き起こされた。女性用のストッキング一足の価格が、政府局長の月給を超えている。また、国民党の腐敗が顕著になり、爆撃を免れたあるホテルでは、外国人のために驚くほど豪華な結婚式が開催されていた。」あるアメリカのパイロットは、香港からの飛行機が薬品や補給品ではなく、高官向けの贅沢品を運んでいるとスチュアートに告げた。スチュアートはさらに、国共が内戦に突入するかもしれないということを懸念し、これが正確な予言となった。

4月28日の会談で、蒋介石はスチュアートに対し、国際情勢の急激な変化に伴い、中国の政策が変化したことを何度も強調し、抗日戦争は自由国家と軍事侵略者との間の世界的な闘争となったと述べた¹¹⁹。また、蒋介石はスチュアートに「華北の日本人に情報を引き出されないように」と注意を促した¹²⁰。5月7日、スチュアートは汪兆銘政権の周仏海と陳公博に会い、蒋介石の意向を伝えた。それによれば、蒋介石は「和平に興味を持っておらず、世界大戦が終結した後でなければ日中問題は解決できない。日本は持ちこたえられず、最終的な勝利は中国のものである」と語った¹²¹。

5月の北京では、日本が文教政策を推進し、中国の知識層を英・米・ソから切り離し、日本との協力関係を築こうとし、共産党の徹底的な掃討も目指していた。そのため、日本は日本語を普及させ、第三国の学校や基督教を指導する意向を示していた¹²²。6月23日、スチュアートは燕京大学のメンバーの結婚式に出席し、翌24日に自分の65歳の誕生日パーティーと大学の卒業式を迎える予定であった。キャンパスの生活は一見平和で幸福に見えたが、同時に日本軍と共産党ゲリラの戦闘が燕大付近の丘陵地帯で響いていた。一方、日本は再び燕京大学に圧力をかけ、日本人教授を採用するよう要求したが、スチュアートは学生が華北を離れるための許可を得ることに尽力していた¹²³。日米関係の緊

¹¹⁶ FRUS, 1941, IV, "The First Secretary of Embassy in China(Smyth) to the Secretary of State", Peiping, April 3, 1941, Document 65, 435-436.

¹¹⁷ Stuart to Trustee, April 2, 1941, J.L.S.-RYU, Box: 360, Folder: 5546, 339-342.

¹¹⁸ FRUS, 1941, V, "The Ambassador in China(Gauss) to the Secretary of State", Peiping, April 16, 1941. Document 816, 3193-3196.

¹¹⁹ Stuart to Trustee, April 28, 1941, J.L.S.-RYU, Box: 360, Folder: 5546, 352-356.

¹²⁰ 蒋介石《蔣中正日記》、1941年4月28日、60。

¹²¹ 蔡德全編注《周仏海日記（上）》、1941年5月7日、460。

¹²² 『月報』〔北支軍参謀部第4課〕1941年5月号、5。「月報提出の件（1）」JACAR（アジア歴史資料センター）

Ref. C04123399200、陸支密大日記 第46号 1/2 昭和16年（防衛省防衛研究所）

¹²³ Stuart to Trustee, June 23, 1941, J.L.S.-RYU, Box: 360, Folder: 5547, 396-400.

張が高まる中、アメリカ国務省も燕大の職員がアメリカから戻ることを制限し、代わりに成都の華西大学のような「自由中国」への移動を支持していた¹²⁴。

6月、スチュアートは理事会に対し、日本の指導者の中には合理的な和平を求める者もいるが、問題は、日本には権威がありかつ個性的なリーダーが欠如していることであると報告した。アメリカは日本に同情することができるが、それはウィルソンが提唱した「友好的な援助」に限られ、その主要な態度は侵略を非難することにあると述べた。また、共産党の指導者たちは依然として蒋介石の政府を支持しており、日本が華北の新四軍と停戦協定を結ぼうとしても成功しなかった¹²⁵。スチュアートは一貫して共産党に対して好意的な態度を示していた。6月末、スチュアートはアメリカ政府に対し、中国政府が共産党に対する財政的、軍事的、さらには医療的支援を差し控えていることを伝えたが、アメリカ政府は引き続き中国を支援し、中国政府に圧力をかけ、共産党と協議を達成して日本に対抗するよう促すべきだと提案した¹²⁶。

7月14日、在北京大使館の参事官ブトリックが国務省に対し、板垣征四郎を代表とするグループが(1) 蒋介石との交渉(2) 中国からのすべての武装部隊の撤退(3) アメリカの何らかの形での関与を通じて日中戦争を終結させたいと考えていると伝えた。板垣は、ローズベルトと蒋介石の同意を事前に得て日米中の会議を開催することを希望していた。また、ブトリックは、アメリカが交渉に参加すれば、極東における利益を守りつつ、日中間での影響力を維持することができるだろうと述べた¹²⁷。しかし、7月22日、国務長官の特別顧問ホーンベックはこれに対し、時間の要因は日本にとって極めて不利であり、アメリカの外交政策は日本が中国で失敗することを前提にするべきだと慎重に否定した。中国の努力とアメリカの支援、そして時間の要素が、日本の中国での存在を自然に消し去るだろうという見解を示した。しかしホーンベックは同時に、スチュアートの人脈が多く有益な情報をもたらしていると称賛した¹²⁸。

7月24日、スチュアートは板垣が蒋介石との直接交渉を望んでいることに対し、汪兆銘が不満を抱いていると報告し、東京は板垣を朝鮮軍司令官に異動させ、これが板垣と陸軍大臣東条英機との争いを引き起こしたと述べた¹²⁹。これにより、板垣を通じた和平の道は閉ざされた。7月28日、日本軍が南インドシナに進駐した後、アメリカ政府は日本の資産を凍結し、石油の輸出を禁止した。スチュアートの願望がついに実現したのである。8月、スチュアートはまだ和平の希望を捨てず、アメリカ政府に対し、断固たる行動を取り、日本はアメリカが戦争を恐れているという誤解を正すよう促し、日本が10月に正式に和平交渉を申し出ると予測していた¹³⁰。

9月、日米間の長引く外交交渉が続く中、スチュアートは内心で焦燥感を抱き始めていた。彼は、太平洋地域における真の危険は、戦争への恐怖がアメリカの対日政策を慎重にさせ、その結果、真の平和を達成する機会を失ってしまうことにあると考えていた。スチュアートは、想定される日米首脳会談が戦争を引き起こすことを恐れていたのではなく、むしろアメリカの妥協が虚偽の平和をもたらすことを懸念していた。彼は、アメリカが先延ばしにせず、日本と直接対決して平和を達成するべきだと主張していた。たとえその対決がわずかな可能性で戦争を引き起こすとしても、それは避けられ

¹²⁴ Stuart to Evans, July 16, 1941, J.L.S.-RYU, Box: 360, Folder: 5547, 419.

¹²⁵ Stuart to Trustee, June 21, 1941, J.L.S.-RYU, Box: 360, Folder: 5547, 396-400.

¹²⁶ FRUS, 1941, V, "The Counselor of Embassy in China(Butrick) to the Secretary of State", Peiping, June 25, Document 556, 2143-2145.

¹²⁷ FRUS, 1941, IV, "The Counselor of Embassy in China(Butrick) to the Secretary of State", Peiping, July 15, 1941, Document 216, 1223-1226.

¹²⁸ FRUS, 1941, IV, "Memorandum by the Adviser on Political Relations(Hornbeck)", July 22, 1941, Document 231, 1277-1278.

¹²⁹ FRUS, 1941, V, "The Counselor of Embassy in China(Butrick) to the Secretary of State", Peiping, July 24, Document 571, 2215-2217.

¹³⁰ FRUS, 1941, IV, "The Counselor of Embassy in China(Butrick) to the Secretary of State", Peiping, August 21, 1941, Document 275, 1497-1499.

ない戦争であり、最終的には日本に不利な形で終結すると信じていた¹³¹¹³²。この見解に対して、国務省のホーンベックも国務長官ハルに「スチュアートは核心を突いている」と語った¹³³。ホーンベックは、国務省内でローズベルトと近衛文麿の首脳会談に強く反対していた人物であり、結局、日米首脳会談の構想も実現しなかった。

9月末、スチュアートは匿名のアメリカ人が日本から送った報告を受け取った、「日本政府は依然としてアメリカ政府を刺激しないように慎重に行動していた。ある日本人は『アメリカの汎アメリカ主義やモンロー主義の政策は、日本の中国および西太平洋での政策とほとんど変わらない。日本はアメリカが西半球を主導することに反対していないが、アメリカが日本とドイツに同様の権利を認めることを妨げることに反対していた』と述べていた。また、日中間の和平に対してはほとんど期待が持たれておらず、大多数の日本人は悲劇的な宿命論を抱いているように見えた。」匿名のアメリカ人は、日本人が「戦争は避けられない」、「不幸な出来事を申し訳なく思うが、ここまで来た以上、戦争は続けなければならない」というような発言を頻繁に耳にしていた。また、彼は、日本人は非常に従順であり、天皇のためにすべてを犠牲にする覚悟があるように見えると報告した¹³⁴。日本社会はすでに、総力戦の準備が整っていた。

同じく9月、スチュアートはアメリカの保護がなければ、燕京大学は存続できないと記している。日本人の目には、アメリカは怠惰で、外交政策は混乱し、戦争を嫌っているものの、それでも恐れるべき強大な力を持っているように映っていると感じていた。そして、スチュアートは新学期が始まってもなお、日米が開戦しない可能性は残されていると見通していた¹³⁵。

また、スチュアートは理事会に対して次のように報告した、「燕大は、常に中国への忠誠を表明しつつも、日本を含む国際的な善意を受け入れてきた。日本の侵略を無駄かつ危険と非難するのではなく、対日関係の発展を意図していた。日本から反日活動の中心と見なされていたが、日本人との交流によってその疑念は徐々に薄まっていった。しかし、日本が燕大を本格的に占領したとしても、物理的には存在し続けるかもしれないが、その魂は必ず失われるだろう。また、多くの漢奸は燕大に対して友好的であり、彼らは敗北主義や機会主義に染まった老成で、国民党の指導者とは政治的見解が異なるが、中国人としての基盤は持ち続けていた。漢奸は実権こそ持たないものの、日本が政策を実行する上で不可欠な存在であり、その影響力は無視できない。」¹³⁶この時点でスチュアートにとって、漢奸や日本人との関係は依然として燕大の存続を維持することと切り離せないものであった。

10月31日、王克敏はスチュアートに、「日本は対中戦争を終わらせたいが、中国をいくつかの部分に分割し、日本が望む覇権を維持するつもりだ。日本は華北における面子と経済的利益を救いたがっており、一つの大きな問題は、汪兆銘をどう処理するかであった」と語った。王は依然として汪兆銘工作を嫌っていた。スチュアートは、王が日中両国の福祉のために真剣に努力していると考え、アメリカが引き続き日本に圧力をかけ、日本の自由派を奨励し、過度に軍事派を刺激しないようにすることで、最終的に日米戦争を防ぎ、和解を達成できることを望んでいた。これに対し、在北京大使館の

¹³¹ The real danger on the Pacific, September 18, 1941, J.L.S.-RYU, Box: 360, Folder: 5548, 466-467.

¹³² FRUS, 1941, IV, "Memorandum by Mr. John P. Davies, Jr., of the Division of Far Eastern Affairs", Washington, November 3, 1941, Document 414, 2123-2126.

¹³³ Hornbeck to Hull, 23 September 1941, Hornbeck Papers. Cited from Yu-ming Shaw, *An American Missionary in China: John Leighton Stuart and Chinese-American Relations*, 136.

¹³⁴ Stuart to Trustee, September 23, 1941, J.L.S.-RYU, Box: 360, Folder: 5548, 474-476.

¹³⁵ Stuart to Trustee, September 25, 1941, J.L.S.-RYU, Box: 360, Folder: 5548, 478-481.

¹³⁶ Stuart to Trustee, September 25, 1941, J.L.S.-RYU, Box: 360.

ブトリックは、日本は華北に非常に強固な基盤を持っており、駐屯軍が存在する限り、日本が経済的利益を放棄するという約束は信じられないとコメントした¹³⁷。

スチュアートが予測した虚偽の平和のように、1941年12月7日、日本は真珠湾を奇襲して、日米は戦争に突入し、スチュアートは終戦まで拘禁されることとなった。

4. おわりに

本稿をより広い視点から捉えると、「スチュアート式」和平工作の特質は、単なる蒋介石との和平交渉にとどまらず、燕京大学の存続と維持を図りつつ、中国の独立や日米中関係の改善を目指す多面的かつ包括的な取り組みを伴う点にあると考えられる。スチュアートの和平工作が失敗した理由として、日中双方が譲歩しなかったことに加え、和平工作自体が彼の多くの業務の一部に過ぎず、付随的な情報伝達に留まっていたためである。この状況から、スチュアートの役割が多面的であることが浮かび上がる。彼は宣教師、民間外交官、教育者として活動していたが、最も重要な役割は、燕京大学の学長としての職務であった。

スチュアートは、武漢や重慶を5回訪問し、そのうち4回は和平提案を伴っていた、(1)1938年2月～3月にかけての和平提案は、華北日本軍の多田駿、王克敏によるものであった。(2)1939年5月には、和平提案に関与した史料は、本稿においては確認されていない。(3)1939年7月の提案は、華北日本軍の喜多誠一、王克敏によるものであった。(4)1940年3月～4月の提案は、華北日本軍の喜多誠一、王克敏、汪兆銘によるものであった。(5)1941年2月～5月の提案は、中国派遣軍の板垣征四郎からのものであった(板垣関わった桐工作はすでに失敗した)。

スチュアートは初めこそ熱意を持っていたが、汪兆銘政府が成立した後は現実を認識するようになった。スチュアートは、日本国内の分裂状況では統一的な妥協は不可能であり、蒋介石も妥協しないため、和平工作は困難であると理解していた。日本側の考えについても、戦後に陸軍省の官僚が回想し、スチュアートの和平工作には一縷の望みがあったが、「桐工作」(1939年12月～1940年9月)が既に開始されていたため、日本側は混乱を避けるために積極的に進めなかったと述べている¹³⁸。

スチュアートは、北京の日本占領者との関係を維持することが、燕京大学の存続に不可欠であると考えていた。和平交渉は、単にその強固な関係の一部にすぎなかった。蒋介石との親しい友人関係を考えると、彼に日本のメッセージを伝えることは難しいことではなかった。彼は自伝の中で、「蕭正誼の助言に従い、華北の日本人を喜ばせようとしたが、その犠牲も価値があった」と述べている¹³⁹。また、スチュアートは、単に日本と「危険で無駄な敵対関係」を築くことを望まず、日本には平和的で自由な要素も存在すると信じていたため、軍国主義が真の脅威だと考えていた。加えて、彼は漢奸を絶対的な裏切り者とは考えておらず、それは個人的な関係だけでなく、燕京大学の存続にとって華北の中国高官が重要な支柱であったからである。加えて、スチュアートは、日本人が自分の蒋介石への影響力を過大評価していると述べ、日中和平においてアメリカと自分が役割を果たすことを期待していたが、次の三つの点は明確であった、(1)蒋介石政府の抵抗を強く支持すること。(2)長城以南の日本軍が全て撤退すること。(3)汪兆銘工作に対する嫌悪であること。したがって、スチュアートの和平活動には、中国の領土と主権の一体性を守るという明確な背景があった。

¹³⁷ FRUS, 1941, IV, "The Counselor of Embassy in China (Butrick) to the Secretary of State", Peiping, October 31, 1941, Document 412, 2115-2117.

¹³⁸ 「大本営陸軍部<2>昭和十六年十二月まで」第二章 好機南進・三 支那事変解決ための努力」29-30。

¹³⁹ John Leighton Stuart, *Fifty Years in China*, 127.

次に、1937年から1941年の4年間、スチュアートは大部分の時間を燕京大学で過ごしており、彼の主要な役割は常に燕京大学の学長であった。本稿では、スチュアートが燕京大学の業務を処理していた多くの事実を省略している。スチュアートが武漢や重慶に向かう際は、宗教、教育、政府、民間など様々な活動や面会に参加しており、和平活動はその中の一つに過ぎなかった。例えば、在北京日本大使館の武官、今木武夫は回顧録の中で、スチュアートは1年に数回しか外出せず、滞在時間が長すぎて意見交換がうまくいかなかったと書いている¹⁴⁰。さらに、彼は蒋介石夫妻に対して宗教的な相談役としても機能しており、蔣の基督教精神が彼のリーダーシップと中国の抵抗に役立っているとよく称賛していた¹⁴¹。和平交渉は彼にとって副次的なものであり、自伝の中で彼は、和平工作についても曖昧な記述をしている、「1938年2月に重慶から戻った際、王克敏が自分に日本への伝言を頼み、私はそれを引き受けた。その後、毎回南下する前、私は『大胆にも日本の当局者に、私に（重慶へ）何か伝えることはあるか！』と尋ねていた」¹⁴²。また、スチュアートは、蒋介石の合理的な和平条件を日本人に伝えたが、それは中国政府の「公式な態度」ではなかったとも記している¹⁴³。これにより、スチュアートが和平工作を主要な使命や、正式な任務とは捉えていなかったことが明らかとなる。

スチュアートの影響力について、彼の書簡やメモは、民間の有力者や国務省の官僚、さらにはグルー駐日大使やローズベルト大統領にも読まれており、その具体的な影響力は評価しにくいものの、彼がアメリカの外交政策において情報提供と助言の役割を果たしていたことは明白である。また、スチュアートは日本、中国、傀儡政府の間で和平交渉の伝達者としても認識され、特に蒋介石との個人的な友好関係から、彼の意志を伝える橋渡し役を担った。さらに、華北や南京の傀儡政府の中国人官僚とも緊密な協力関係を維持し、アメリカの民間人と日本の各界をつなぐ架け橋としても機能し、日本人のアメリカや燕京大学に対する見方を改善していた。例えば、日本陸軍の記録によれば、「スチュアートの和平工作は長期間にわたり断続的に続き、総司令部や陸軍中央部に影響を与えた」とされている¹⁴⁴。総じて、スチュアートは日米中関係において非公式な調停者であり、平和と相互理解を促進する重要な役割を果たした人物である。

さらに、スチュアートの平和主義は、基督教の平和と非暴力の教義に基づいており、ウィルソンの理想を掲げていた。また、人間の内面的な善、民主主義と平和に基づいた日米中の友好関係を軸とする太平洋秩序、そして国際機関に基づく平和的世界共同体を理想としていた。彼の理想主義には過度な面もあり、アメリカの経済制裁が日本の軍事政策を変える力を過大評価し、日中和平が実現すれば日米中の友好関係が確立するという楽観的な見方に固執していた。また、スチュアートは蒋介石政権に独裁的な傾向を感じつつも、その民主的ビジョンを信じており、中国共産党についても、ソ連の傀儡ではなく抗日戦線の一員であり、国民政府にとっての脅威ではないと見なしていた。彼の共産党に対する同情と評価、そして燕京大学の学生や教員による共産党支援を推進した行動は、彼が日本軍の侵略に抵抗し、華北や中国の独立を回復し、最終的に燕京大学の存続を守ることが最優先事項であったことを物語っている。

¹⁴⁰ 今井武夫『支那事変の回想』（東京：みすず書房、1964）、213-215。

¹⁴¹ The Religious life of General & Madame Chiang Kai-Shek, May 17, 1940, J.L.S.-RYU, Box: 360, Folder: 5547, 394-395.

¹⁴² John Leighton Stuart, *Fifty Years in China*, 131.

¹⁴³ John Leighton Stuart, *Fifty Years in China*, 132-133.

¹⁴⁴ 「戦史叢書第090巻 支那事変陸軍作戦<3>昭和十六年十二月」（東京：朝雲新聞社、1975）、28。